

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

My Requiem : The Poetry of Kyozo Takagi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1971-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 道雄, Nakano, Michio メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2271

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



「わ が 鎮 魂 歌」

——高木恭造の詩とその英訳——

中 野 道 雄

(1)

詩人高木恭造は明治36年青森市に生まれた。弘前高校、満州医科大学を卒業し、以後今日まで医業を営む。⁽¹⁾ 中学時代から文学書に親しんでいたが、詩作を始めたのは、弘高を卒業して地元の新聞社に勤めていたときで、高木が「埋め草代りに匿名で詩のようなもの」を載せていたのを、主筆として赴任して来た福士幸次郎が見つけて、「これは君が書いたのだろう。ハイカラな言葉で書くのもいいが、詩というものは、借りものの言葉でなく、自分が本当に持っている言葉で書くものだよ。それには先ず小さい時から今まで使っている言葉、而もぴんからきりまで、徹底的に方言だけで書いてごらん⁽²⁾」とすすめたのであった。その後、高木は東京に出て出版社に勤めていたが、昭和3年に夫人のすすめで満州に向かい、満州医科大学に学んだ。卒業後、現地で医師をしていたが、昭和21年引揚げ、この年、福士が亡くなっていたことを知る。この間、福士と高木とは、生活の面でも、文学の面でも、常に暖かい師弟ないし兄弟関係にあったらしい。

地方主義の立場に立つ福士幸次郎の方言詩のすすめは、高木のペンから、珠玉の詩として結実したのであった。それらはのちにまとめられて「まるめろ」(初版昭和6年)となる。その序の中で、福士は、「高木君の詩集が生れる。それは夢が本当になったのだ。高木君にもさうであらうが、私に取っても全

(1) 以下の伝記的記述は、主として「まるめる」所収の〈走り書覚え書〉、〈福士幸次郎の想い出〉および、詩人から筆者あての私信にもとづく。

(2)(3) 上記〈福士幸次郎の想い出〉。

く君に劣らずこれは意外な、しかし悦ばしい仙女の魔法の棒の出現物である」と述べた。集中、「冬の月」は絶唱とされ、いくつかのアンソロジーに再録されている。

一方、高木は、福士自身、上掲の序の中で、「高木君も地方語だけの詩人ではない。広い世界を目懸けて共同語の新味豊かな詩も書く」と言っているように、共通語による詩も多く、また小説、戯曲などの作品も多い。以下は私の知りえた高木の作品のリストである。

1. 「まるめろ」(昭和6年初版「北」編輯所・28年再版風の木社・38年青柳書店より定本として出版・42年津軽書房より出版)。

<生活^{クラシ}>など34編の詩をおさめる。福士が言ったように「びんからきりまで」津軽弁によって書かれている。高木の名をもっとも高からしめた作品であろう。後述のように英訳がある。

2. 「わが鎮魂歌」(昭和10年椎の木社)。

<年輪>など40編の詩をおさめる。「安西冬衛氏に」という献辞があり、発行者として百田宗治の名が見える。この3者の関係は、高木が渡満するときに、福士が「百田宗治さんの処につれて行って、大連の安西冬衛さんへの紹介状を書いてもらって持たせてくれた」とあること⁽³⁾から、およその想像ができる。この詩集から6編を選んで英訳し、原作と共に(3)に掲げる。背景はすべて満州である。

3. 「鴉の裔」(昭和14年作文発行所)。これには<東方>など24編の詩がおさめられ、文語詩をまじえる。「わが鎮魂歌」の植民地カラーとユーモアが沈潜し、望郷と悔恨の思いをこめた抒情の傾向が強い。満州文話会賞受賞。

4. 「奉天城附近」(昭和15年作文発行所)。

2と背景・心情を同じくするが、小説であるだけによりリアルで暗い。日本文学にはめずらしい植民地文学であると思う。

5. 「方言による三つの物語」(昭和40年津軽書房)。「まるめろ」の地方詩

のころろみを散文で行ったもの。生々しく人間的なフォークロアである。

6. 「詩人でない詩人の詩でない詩」(昭和40年作文社)。高木の近作詩集。老境に入った詩人の心境を映す。

7. 「婆々宿」(昭和42年作文社) 短編小説集・現代の東北地方の人々の生活の哀歓を描く。

8. 「落葉の群れ——或る医学生の手記——」(昭和43年津軽書房) 満州からの苦難の引き揚げ生活における人間風景を記録した長編小説。

他に、戯曲「帰郷」3幕(昭和34年雑誌「地方演劇」第2巻第2号所載)がある。また詩人よりの私信によれば、これらの他に、小説20編、詩30編があったが、満州から持って帰れなかったという。なお現在高木は長編詩の制作にとりかかっており、「これがおそらく最後の詩」となろうと私信で述べている。

高木のこれらの作品を日本文学史のどこにどのように位置づけるかを論じることが、もとより、一英語学徒の私にできるわけではない。

ただ、方言詩については、福士が40年前に言った、「世は雪と氷の大自然の偉力のもとに窮乏の饑と単調の倦み疲れと眠りの放心とに閉された季節の絶頂にある時に、日本に於ける地方主義の最初の詩が芳しい果実を結ぶに到ったのだ」という評価が、今日でもそのまま再確認されるであろう。また共通語詩についても、福士の「広い世界を目懸けて共同語の新味豊かな詩も書く」という言葉どおり、高木の語彙はモダンでハイカラである。高木が、同時代の詩人たちと同様に、フランスをはじめとする西欧の文学またはその翻訳から、新しい語彙や文体を吸収したことは明らかである。ジイドやランボーなどからの引用や、それらへの言及も少なくなく、「まるめろ」中の

漁 師

コスポネ アネコ イ
腰骨の陰サ娘ア見ねぐなるでバナ

という短詩は、フランスの野獣派の絵のイメージだと私信において詩人自ら

語っている。また現在執筆中の長編詩では、エリオットの「ここは死の国」という句が「キャッチフレーズ」になっているという。

このような透明で、軽妙で、色彩的な文体を創造した高木の詩人としての資質が、初期の「まるめろ」をして、地方的であるがゆえに地方的評価しか与えられない世上の方言文学から一頭地を抜かしめたものと思われる。

(2)

私が高木の詩に初めて接したのは、真壁仁・編「詩の中にめざめる日本」(昭和41年・岩波新書)においてである。それにおさめられていた<冬の月><夜明け><百姓>の3編になんとか心ひかれたので他の数編とともに英訳して、当時、日本女子大学で教えていた英国の詩人 James Kirkup 氏に送ったのであった。氏はその中から高木氏の3編を選び、私の訳を improve して、カナダの University of Victoria から発行されている文芸誌 *The Malahat Review* に送った。同誌の編集者は、この内<冬の月>を選んで同誌の1968年4月号に掲載した。しかし興味あったことは、編集者が、校正中に、「うっかりしていたが、この詩が翻訳であることを発見した。至急に作者について information をくれ」と言ってきたことであった。私は、これは、この詩が翻訳というハンディキャップにもかかわらず、一流の英国詩人の創作詩とまちがえられるだけのクォリティをそなえていることの証拠ではないかと思ったのであった。さて、この「冬の月」とその英訳を次に掲げる。

冬の月

^{カガ} 嬌^{フタラ}ごと^{オモテ}殴いで戸外サ出へれば

まんどろだお月様だ

^フ吹雪いだ^{アド}後の吹溜^{ヤブ}こいで

何処サ行ぐどもなぐ俺^ワア出^ドへて来^{ニグ}たん

——ドしたてあたらネ憎^{ニグ}くなるのだベナ

憎^{ニグ}がるの^{ニグ}ア愛^{ニグ}がるより本気^{ニグ}ネなるもんだネ

そして今まだ愛いと思ふのアドしたごとだバ

あゝ みんな吹雪^{フキ}と同じせエ^{オンナ}過ぎてしまれば
まんどろだお月様だネ

The Winter Moon

I hit my wife and went out and saw
the moon like ten thousand lanterns.
Over the soft snow after a snowstorm
I am walking without any idea where I am going.

—What is it makes me hate so hard?

When we hate, we are more serious than when we love.

So now why am I starting to feel love for her again?

Everything is like that snowstorm.
When it is over, we see
the moon like a thousand lanterns.

ごらんのように、原詩では、カタカナとひらかなの使い分けで、方言の微妙な調子を出し、また、漢字とふりがなを使用して、方言の壁を破ろうとしている。日本語ならではの工夫である。私は、イギリス北部出身の Kirkup 氏によって、Geordie dialect あたりへの翻訳を期待したのであるが、氏によれば、英語でそのようなことをすれば、まったく communication が閉ざされる⁽⁴⁾とのことである。

また「夜明け」は “Dawn” として、京都で発行されていた英文文芸誌 *TransPacific* 誌 2 号に掲載されたが、同誌の編集者 Nicholas Chrome 氏は

(4) しかし、「まるめる」の全訳の中の他の詩において、若干の方言語彙をとり入れる試みを行った。

この詩を gem と絶賛し巻頭にかざった。

次に私たちは「まるめろ」を全訳し、*The Winter Moon* として *Japan Quarterly* 誌（朝日新聞社）1970年 July-September 号に発表した。発行部数の多い同誌の影響力は大きく、すでにいくつかのアソロジーから転載の申しこみがある。

このように高木の詩が海外に少なからぬ反響を呼んだのは、翻訳の名手 Kirkup 氏の才腕によるところもあるが、やはり本質的には、高木の詩が持つクオリティによるものと思う。Kirkup 氏は、一般に、日本の詩は、著名な詩でも、骨格が弱々しく、英語にしたときに、その力を保ちきれないことが多いと言っているが、高木の詩はこの弊をまぬがれている。また高木の抒情は、豊かで力強く、ユニヴァーサルな人間感情に根ざしている。これらが海外の人たちにアピールした理由であろう。

しかし高木が、いかに方言の詩語化に心血をそそいだかを考えるとき、私はじくじたるものを覚えざるをえない。高木は「まるめろ」の英訳について「読んで行って思わずほほえんでしまいます」と言い、「私を指導した福士幸次郎もここまでは想い及ばなかったことだと思っております」と私信で述べている。氏はやさしい気持ちで言っておられるのであろうが、私には大きな痛棒となってひびく。私たちがしていることは所詮、福士や高木から見れば、心なきわざなのではないだろうかという思いをぬぐい切れない。

そのわざをふたたびくりかえすことになるのだが、「わが鎮魂歌」から6編をえらんで英訳する。

「犯される潜水艦」と「曇天の海」のユーモアは私にはイヴリン・ウォーのそれを思い出させた。また「遡行」と「記念日」は、縦書きされると、まん中から左右が対称の構成になっている。私はいつかこれに似た S・F ショート・ショートを読んだ覚えがある。まん中でタイム・マシンが動き出し、それまでの文章が逆につづられて行く趣向のものであった。言うまでもなく、「記念日」のしゃれた構成には及ぶべくもないものであったけれど。「風塵」

のまだるっこしい状況、「新しい町」の新開都市の抒情なども印象深いものがあると思う。

(3)

新しい街

僕は夜明けのホテルを嫌った。街は漆喰の匂に満ちてゐた。僕は僕の番地を尋ねよう。

風が吹く度に「給水塔のある街」は氷の上に荒々しいデッサンを描いた。

凍った樹木の間から、歯科医の看板の蔭から小学生らが殺到して来た。スケートを短剣のように擬しながら。

そして僕は坂の上に立った。広場には支那人の官吏たちが、空には鴉の群が乱れてゐた。もはや僕は僕をトさうとはしなかった。

A New City⁽⁵⁾

The hotel at dawn filled me with horror.

A smell of mortar was hanging about all the streets.

—I must look for a proper place to live—

Each blast of wind cast rough outlines of water-towers over canvases of ice.

From behind frozen trees,

from behind a dentist's signboard,

school children rushed towards me holding their skates over their heads like daggers.

(5) 以下6編の詩の英訳については、James Kirkup氏の校閲を得、2、3の点で同氏のアドバイスによって改めたことを記し、同氏に感謝する。

I stood at the top of a slope.

Chinese government officials were crowding the square and crows the sky.

Already I had lost all hope of making my fortune here.

曇天の海

「どうかしたのでしょうか。」 定刻はとくに過ぎたのに船は微動だもして居ない。「大方出帆旗でも見つからぬのでせう。」 船医は僕のために健胃剤を調合しながら答えた。「これではないいでせうネ。」 僕は先刻甲板の上で拾った青い縁のある手巾を石油の匂のする手巾をズボンのポケットから出して見せた。船医は微笑したまゝ船窓を開くと海はその皮膚で曇天を支えてゐた。それから僕はその手巾でゆっくり僕の靴を拭ひ始めた。

The Sea Under a Cloudy Sky

"What's the matter with this ship?"

The ship hasn't moved an inch though sailing time has already passed.

"I suppose they can't find the Blue Peter,"

answered the doctor, mixing a draught of medicine for my stomach.

"It wouldn't be this, would it?"

I extracted from my trouser pocket

a blue-hemmed handkerchief stinking of petrol

that I picked off the deck a while before.

The doctor, smiling, got up and opened the porthole.

We could see a cloudy sky supported on the skin of the ocean.

Then I started to wipe my shoes, slowly, with the blue cloth.

遡 行

九ミリ映画『巴里の風景』を始めよう。僕等はセーヌ河を下るのだ。対岸のマロニエの並木、タキシヤバスの疾駆する間を紳士が新聞を読みながら歩く。モンパルナッスの墓場には詩人の記念像^{モニュメント}。花束を捧げてゐる若い人々の中には僕は見当らない。エッフェル塔^{ムウランルージュ}に駆け上れば赤い風車が廻って夜になる。だがこれでおしまひだ。裸体の娘達が出もせず。あゝそしてこゝは巴里ではない。

冷たくなった茶を啜り僕等は黙ってしまふと、厚^{カーテン}ぼい窓掛の外は風の音。太陽が黄いろい程の埃風。さあ、再び映画を始めよう。フィルムを巻き返しもせずに。

さて赤い風車の夜が明けぬうちにエッフェル塔から飛び下りよう。若い人々は詩人の墓場から花束を取上げる。紳士は新聞をポケットに終ひこみ、タキシヤバスの後退するマロニエの並木は対岸になる。あゝ僕等はセーヌ河を遡る。だがこれでおしまいになる。そしてここは巴里ではない。

Sailing Up The Seine

Let's have a look at "The Sights of Paris," a 9 mm motion picture.

We're sailing down the Seine.

Marronnier avenues on the other bank of the river.

Gentlemen reading newspapers are walking among dashing taxis and buses.

A poet's statue in the cemetery at Montparnasse.

I am not among those young people laying bunches of flowers on the tomb.

We scamper up the Eiffel Tower.

The Moulin Rouge goes milling round as night falls.

This is the end of the film, and we did not see naked girls.

Oh! Paris is not with us any more.

Here we are again sipping lukewarm tea in silence.

Outside the thick curtains we can hear the sound of the wind.

Well, let's run the picture through again

—without rewinding the film.

First we jump off the Eiffel Tower before dawn breaks on the Moulin
Rouge.

Young people snatch away bunches of flowers from the poet's tomb.

Gentlemen stuff newspapers back in their pockets.

Taxis and buses dash backwards along marronnier avenues on the other
bank of the river.

Now we are sailing up the Seine and this is the end of the film.

—Paris is not with us any more.

風 塵

——あれは再び帰らない——

僕は蒙古馬を駆って風塵の中を患家に辿り着いた。だが僕の往診靴は何
時の間にかすり替へられてゐた。新型自動車のカタログの入った奴に。

(四洮鐵路の頭等車、僕に南瓜の種をすすめた隣席の青服の支那人め!)

僕は患者であるニッポンの少女の胸にぢかに耳をつけて聴診せねばなら
なかった。僕は起伏の激しい少女の胸を、その肋骨の一本一本を探って暗
い洞窟に降りなければならなかった。僕の往診靴は何処へ行ったのだらう
かと。少女は絶えず「ニッポンの海が見たい」と讒語を続けてゐる。そし
て壁に耳をくつつけてゐる僕に明かに聞えるのは退潮時の騒音であつた。
だから僕は躊躇なく癆を診定することが出来たのだ。けれども僕が何等処
置を施す術もなく少女はそのまま息をひいてしまった。

僕が患家を去る時、生憎僕の蒙古馬は何処かへ逃走してしまつてゐた。
僕は新型自動車のカタログの入った鞆を抱へて風塵の中によろけ入った。
ニッポンの長い海岸線を想ひ、僕の往診鞆は何処へ行つたのだらうかと。

Dusty Wind

——That never comes back again——

I drove a pony through the dust-storm to reach a patient's home.

But instead of my doctor's bag I found I had taken
one full of catalogues of new motorcar models.

(That damned Chinese in blue who offered me pumpkin seeds in the
first-class carriage of the Sitao Railway!)

I had to apply my ear right on the Japanese girl's chest.

I had to examine by touching every bone of her chest
and make my descent into a gloomy cavern, wondering what had be-
come of my bag.

In her delirium she kept on saying she wanted to see again the waters
of Japan.

To my ear, her heart sounded distinctly
like an ebbing tide.

So without any hesitation I was able to diagnose tuberculosis.

But before I could do anything for her as a doctor, she died.

When I left the house, I found my pony was missing.

I staggered through the storm of dust, holding under one arm the bag
full of catalogues of new motorcars.

I kept thinking of the long coastline of Japan,
still puzzling over what had become of my bag.

記念日

風。埃の中の国旗。模擬市街戦。そしてロシア寡婦とこのストーブには火の気がない。

「今日、ミカドの赤ちゃんが生れた日？」

「お前の国が僕の国に負かされた記念日。」

僕はこの答の代りに「僕がお前に負かされた日なんだ。」と

それから僕らは寝台つきの鏡の中に僕ら自身を撮影する。

模擬市街戦。埃の中の国旗。風。

A Memorial Day

Wind.

The national flag in the dust.

A sham street fight.

There is no fire in the stove

nor in this Russian widow.

“Is this the day the Mikado’s baby was iborn?”

“The memorial day commemorating
your country’s defeat by mine.”

But instead of this, I answered;

“The day I was defeated by you.”

Then we lay down in the mirror
set in the head of the bed.

A sham street fight.

The national flag in the dust.

Wind.

犯される潜水艦

潜望鏡の中の共同租界地は中華民国新紙幣の図案に採用するがいゝ。

ロシア娘の海水着は擬粧した囚船だ。

ヒトデ
海盤車の勲章を拒絶した水兵等は白い気泡になって脱艦してしまふ。

ジャイロコンパス
僕は輪転羅針儀の下から一本の阿片吸飲管をひろひ嘗て追駆した魚雷行跡
の燐光を想起したのだ。

それにしても僕が母艦への水中信号符を忘却した故に今宵もまた蠍^{サソリ}星座が
六分儀の焦点を犯し艦齡を病む竜骨^{キール}は海草と泥砂の間をのたうちまはる
だらう。

救命服を脱ぎすてた僕は発令する。

(赤錆びた意志の沈下を深度計にて測れ)

Sick Submarine

The view of the International Settlement

seen through a periscope

Might be recommended for inclusion in the new design

of bank notes in the Republic of China.

Russian maidens in swimsuits are camouflaged Q-ships.

Sailors who declined the Order of the Starfish

are transformed into white foam and slip from their ship.

I pick up an opium pipe from under a gyrocompass

and recall the phosphorescence

in the wake of a torpedo once our ship tracked.

However, because I forgot the signals to be used in the water

to contact our mother ship,
this evening too, the Scorpion vilolotes
the sextant's centre, and
the keel of the old ship writhes in agony
in mud and seaweed.
I take off my life-jacket and give the order:
"Verify with depth-gauge angle of descent of rust-red morale !"